

# 映画「葛根廟事件の証言」 が制作されて

興安街命日会 代表 大島満吉



2017年5月、望んでも叶えられないであろう、と思われた、ある事件を取り上げた映画が完成した。製作してくれたのは戦争体験を持たない若手映像作家の田上龍一さんである。スポンサーなし



映画「葛根廟事件の証言」より

で映画を  
作るなん  
とても  
考えられ  
ない。そ  
れが2年  
の歳月を  
かけてと  
うとう完  
成させた  
のだ。  
葛根廟  
事件とは、  
1945

年8月、参戦したソ連軍（当時）の侵攻を受けた旧満洲国興安総省興安街（現内モンゴル自治区ウランホト）の住民約1300人が避難途中の葛根廟付近でソ連軍の戦車隊に襲撃され約1000人が命を落とし、翌年の日本への帰国は一割しか帰れなかったという事件である。何故、ソ連軍の戦車隊が民間人の団体を襲ったのか、その時に日本の軍隊はどうしていたのか、満洲国軍はどう動いたのか、地元の中国人あるいはモンゴル人等はどう見ていたのか、こうした謎の解明は研究者でないとできないが、こんな事件があったこと、その事実だけでも記録として残してくれるなら関係者としてこんな嬉しいことはない。

証言しているのは11人である

●冒頭に大櫛<sup>つちや</sup>戊辰さんの写経している姿が映る。大櫛さんは当時17歳、生存者として証言している中では唯一成人で、多くの書物を残しており事件を語る第一人者である。事件のあった8月14日を命日として、毎年慰霊祭が東京目黒の五百羅漢寺で行われており、福岡からの上京が叶わなくなった89歳の大櫛さんは執念の写経を続けている。

●この映画の中で当時の興安総省の最高責任者であった白濱晴澄参与官の長女真砂子さんが語る開戦当日の朝と混乱の中での退避は圧巻である。

多くの記録では関東軍と高級官吏はいち早く退避し、市民を置き去りにしたと書かれている例が多い。しかし白濱さんは違った。総省責任者として市民の退避を見届けた後に、僅かの供を連れて計画通りの行動をとり、後にソ連に連行され

1年後に抑留地で病死してしまふ。

家族8人は母親の園さんのもと19歳の真砂子さんを筆頭に弟妹6人を連れて奇跡的に日本への帰還がなった。しかし父のいない白濱家では毎日の生活に窮し、体力の無い幼児3人が栄養失調で次々と斃れてしまった。戦乱の中でやっと生き残り、祖国に着いてからも命を救えなかった母の苦しみを想うと戦争の酷さは筆舌に尽くせるものではない。これが最高責任者の運命であったことを訴えている。これも知られざる史実であり映像の中で証言している貴重な記録と言えるであろう。

●次に出て来る伏見恵子<sup>としこ</sup>さんは、この年の4月に新京の錦ヶ丘女学校に入学したばかりだった。12歳、今の中学1年生と同じ年齢である。ソ連の開戦を知って母が興安まで帰ろうと勧めてくれた。家族が一緒の方が良いからと。その時、恵子さんは私も女学生だから学校の指示に従い学徒の役目を果たしたいと母に言うて残ってしまった。その結果が母の行方不明や父の葛根廟事件による死亡につながり、親子の永遠の別れとなった。一人っ子だった自分に両親は全ての愛情を注いでくれた。その母の言葉に従えなかった一瞬が取り返しのない悔いとして今

に残った。

毎年8月14日は葛根廟事件の命日であり、この日は必ず慰霊祭が行われている。この日に合わせて伏見さんは毎年千羽鶴を折って奉納してきた。その1羽1羽に祈りを込めて手折る伏見さんの姿は愛おしい。今年で16回目の千羽鶴である。

●私(大島)が事件に遭遇したのは国民学校4年生だった。家族は6名、この事件で5名が生還できたのは最大人数でほとんどの家族は1名しか生還できなかったか、全滅しているのが実態だ。3、4名が生き残った例もあるが、そのような幸運を得た家族は4所帯くらいしかない。1300人を率いた浅野隊は隊列が2キロから3キロに延びていた。目標としていた葛根廟寺院を目前にして「休憩!」の号令がかかった。先頭集団が草原に腰を下ろした時、山の稜線に停まっていた戦車隊が動きだし、避難民に一斉射撃を加えたのだ。女、子どもが中心の避難民は戦車を目の前にして、動けない人もいた。荷物は棄てても子どもを置いては走れない。幼児2人、3人を連れた母親は走ることもできないまま草原の露と散ってしまった。

我が家では母親と私と6歳の弟と3歳の妹が一緒だった。家を出る時、リヤカー

があつたので沢山の荷物を積んで出たが、途中で何人かの声がかかり荷物を載せて欲しいと頼まれた。山積みになった荷物と引き換えに兄と私はリヤカーから解放されてフリーで歩けるようになった。

しかし、途中でリヤカーはパンクしてしまい荷物は放棄され、一番多く持ち出した荷物が一番少ない立場に代わっていた。幸か不幸かその荷物のせいで我が家はバラバラになり兄と警護にあたる父とは一緒ではなかった。

戦車隊に追われた私たちは無我夢中で草原を走り偶然にあった壕の中に飛び込み戦車の襲撃からは逃れることができた。音が静かになり戦闘が止んだと思ったら、下手の方から3人の兵士が壕の中に下りて来た。私は日本の兵隊が応援に来たものところりして兵士の顔を見ていた。ところがそれはソ連の兵隊だった。私の背後からマンドリン銃といわれる連射式銃で固まっていた集団を無差別に銃撃したのだ。その音、砲煙、足音は生きた心地がしなかった。兵士が去った後も戻ってくるかも知れない不安と再度入ってくるかも知れない不安で動けなかった。戦車で蹂躪した揚げ句に兵士が下りてきて銃撃されたのでは浅野隊は全滅したのに等しかった。

父や兄を探しても見当たらない。1キロ2キロの平面を探すことは不可能だ。生き残っている人そのものが見当たらないことで、生き残ったというより取り残されたという気持ちのほうが強かった。朝から何も食べていない上に歩き疲れ、父や兄を探せないことで不安が募るばかりだ。母は私に「どうしようかね」と言葉を送った。もうどうしようも無い。死ぬより道が無いことを私に告げる意味だった。父や兄が見当たらず、食糧もない。女子どもだけで逃げる方法なんて無いだろう。第一行く当てがない。興安街は暴動が起きていると云う。目的の葛根廟にはソ連兵が待ち受けている。広野を行っても結局野垂れ死にするのが見えている。中国人に会っても言葉が分からない。仲間がいないこと、行くべき目標がないことは絶望を意味している。遂に母は覚悟を決めた。傷ついて動けない在郷軍人の刀を借りて妹美津子の首に刃を当ててしまった。「ごめんね、美津ちゃん、お母さんも直ぐ行くからね」。鮮血がはしり、美津子は死んでしまった。私は後ずさりしてその場から離れた。死にたくない…。

●大櫛戊辰さんの証言は当時独身だったので、家族との行動は無く、避難行動の

編成とか職場関連とか襲われた時の心理状態等を証言している。

●佐藤雅寛さんは父とは一緒ではなく、母と妹と叔母と行動を共にしていた。結局父とは会えず、夕刻になって4人は避難現場から脱出したが、生きる望みを失っていた。地元民の物盗りの姿を見ては恐ろしさが増すばかりだった。

数人の女性達も加わり、人数は増えたがこれからの逃避行をリードしてくれる人はなく、近くに流れている河を見つけて水死の道を選んだ。だが水が浅く、ずぶ濡れになりながらほとんどの人が死に切れなかった。夜道を歩き一発の銃声に驚いて各自が低い姿勢で隠れたのが仇となり、母と妹とその時にはぐれてしまい、そのまま永遠の別れになってしまった。

その後は叔母と行動を共にしたが、地元民の妨害にあい、その時の悔しさから雅寛さんが追って来た中国人に口答えしたことで怒りを買ひ、頭と肩を切りつけられた。国民学校3年生のできごとである。

●高田京子さんは興安街に住んでいた訳ではない。鉄道の終点に当たるアルシャン(阿爾山)から南下して興安街に下車してしまっただけだ。父が経営するホテルが興安街にあり、その従業員と一緒に行動するはずだった。しかし、その後

来る列車は無く、避難行動するにも他の隊は先行して、結局残った浅野隊に加わるしか道がなかった。下車しなかったらこの事件に遭わなかったのに運命のいたずらだったのかも知れない。

幸い高田さんのグループは大きな被害に至らず、従兄弟1人が弾に当たって犠牲になっただけで助かった。しかしその後の逃避行は難航を極め、半数が途中で行方不明になるなど日本にたどり着いたのは8名だけに減っていた。

### 残留孤児3人の証言

●石田たか子さんは父が召集されて母子4人の逃避行だった。

たか子さん5歳、弟は3歳、その下に妹1歳が母におんぶされて葛根廟へ向かっていた。たか子さんと弟は馬車に乗せられていた。「戦車が来た時は母も近くにおり、周りがばたばたと倒れた時に、母は1歳の妹を刃物で切り、私たち2人も毒薬を飲ませて自分も口に入れました。私はこれが毒薬と分かり口から出すと弟の口に指を入れて吐き出させました。直ぐに母は息を引きとって死んでしまい、弟と2人がその場に残されました」

「私は弟を連れて大人を探して歩きま

した。幸いモンゴル人が私を発見してくれたのです。連れて行かれた場所で、ここで待つように言われて待っていると眠くなり、その場に寝込んでしまいました。気がついた時、弟の姿がありません。私は夢中で探しましたが見つかりません。困り果てていたところに大人が来てくれ、私はおんぶされて移動したのです。その時黒い動く物を見つけ、大人の人にそこへ行くよう頼んだらそこには動けなくなつた弟がいました。

モンゴル人のお陰で助けられました。学校に行く時は遠くで大変でした。大きくなると結婚相手を押し付けられて苦労しました。暴力を振るう夫で子育ても苦労しました。岡本さんのお世話で日本に帰れて、親戚中が大切にしてくれました。今は中国にも日本にも子ども達がいまいます。今が一番幸せです」

●依田照子さんは長女で1年生でした。父は召集されており、母は4人の子どもを連れて逃避行を余儀なくされていた。「戦車が来た時私は走って逃げましたが小さい子を連れて母とはその時から行方が分からなくなりました。」

畑の中に逃げこんで自分は助かったのですが、母の姿はなく、何処を探しても死んだ人ばかりでした。

私は大人の人を探して一緒に連れて行って下さいと頼みました。その時は可哀想にと云ってくれたのですが、私が眠っている間にいなくなりました。誰もいなくなつて一人ぼっちの私は食べ物を探すためにあちこち歩きまわるうちに親切な中国人に逢い、そこで学校に出して貰うようになりました。

日本との国交回復があつてから、日本の情報を求めて里帰りした時、初めて母が生きて日本に帰つたことを知りました。しかし体力も無く、3人の子どもを失つた悲しみと、父が抑留されて帰っていないことなどあり、居場所を失くして半年ほどで亡くなったそうです。

母も苦労しましたが、今の私は日本人でありながら中国人でもあり、私の娘も中国人であり、日本人なのです。家族の分断もある戦争はとても悲しいものです」

●ウユン（烏雲）日本名立花珠美さんは中国語で証言し日本語訳はテロップで流れる。

「戦争で避難の時父は出張で家を留守にしていました。母は5年生の姉をはじめ1年生の私ほか小さい子がまだ3人居て6人で汽車に乗り込みましたが、出張中の父がこちらに向かつて汽車に乗って来るとの情報があつたようです。」

父が居なくて家族6人での行動は母の負担が大変です。そこで列車を降りて父を待つことにしたのです。ところが次ぎの列車は来ないことが分かり、父も興安街まで帰って来ることができませんでした。移動手段を全く絶たれた私たちは最後の避難団である浅野隊に加わるしかなかったのです。

戦車が来た時、姉は走って壕の中に飛び込んだのですが、後から飛び降りて来た人の下敷きになり死んでいました。1人は馬車に乗せられていたのですがどこに行つたのか見つかりません。母は平常心を失い小さい子をナイフで切りました。驚いた私はその場から逃げたのです。でも周りが死人と重傷者ばかりで怖くない母の所に戻ると、母は苦しそうな顔をして私に何か言いました。

喉から血を流しながら手元の袋から家族の写真と住所の書かれているメモを渡しながら父を探せと言いました。母が息絶えても私はそこから離れることができません。幾日か経ち私は意を決し大人を探しに歩き回りました。橋の上で見つけてくれた人の世話で食事をさせて貰いました。家族5人がこの地で命を失い一人ぼっちの私も後にモンゴル人の父に育てられたのは幸運でした」

●この他に特異な遺族の一人として高知県の青木浩氏が現場付近で父の写真を前にして慰霊しながら父の思い出を語る場面がある。八十路を超えても亡き実父への情愛が胸に迫る。

●藤原作弥氏は父が軍官学校の文官教授であった。軍家族の一員として退避する幸運を得て難を逃れた証言をしている。「二歩間違えば自分もこの事件に巻き込まれていたはずであった。生き残ってこの事件を知った以上、犠牲者への追悼は欠かせない。また一ジャーナリストとしての事件を知らしめる義務もある。大きな事件だけに自分だけが生き残ったといううしろめたさがある」と述べている。

### この映画の意味するもの

11人の証言は戦争の実態をよく表しています。葛根廟におけるソ連兵の襲撃場面こそありませんが、こんな殺戮があったという本物の証言です。

写真や書物による史実も参考になりますが、映画は肉声と表情でその場を写し出します。

葛根廟裏の遭難現場にも入って撮影されたものです。現在の葛根廟にお参りする関係者や地

元の人の祈る場面も本物です。

毎年行われる慰霊祭の様子も入っています。戦後70年を記念して帰国孤児を招き「内蒙古帰国者と語る会」の催しも入っていました。一般の民間人だけでこのような行事を重ねて70年というのも特筆すべき団体でしょう。

国は満洲国に関する史実の自然消滅を待つ姿勢に感じられます。葛根廟事件は日本国でもロシアでも中国でも表に出ません。些細なことなのでしょうか。

このような史実は風化させず記録して残すべきと考えます。

政治家の方にはこのような戦争悲劇を実際に見て日本の政治に取り組んで欲しいものです。

生き残った人の証言は有り難いが、犠牲者一〇〇〇人の声も何処かで響いて欲しい。ドキュメンタリー映画は一般の映画館で取り上げにくいのが現実です。

スポンサーなし、チラシ・ポスターなし、音楽の力も借りずに完成したとは！娯楽映画のような見どころや感激を味わうことは少ないのですが、歴史を勉強する一端にはなります。

小劇場・公民館・会議室・他の映画との抱き合わせ、戦争を知らしめるイベン

ト会場などで取り上げて頂くのを待つのみです。

最後に「ゆふいん文化・記録映画祭」で第10回松川賞受賞が決定した作品であることを申し添えます。

また国際善隣協会で行われた6月30日の試写会では35人の方が見てくれました。2回目の試写会7月24日には50人の来場者があり多くのコメントが寄せられました。

### 上映を希望する場合の連絡先

興安街命日会 大島満吉 練馬区西大泉  
5-6-8 TEL 03-3924-7764

### 筆者略歴（おおしま まんきち）

群馬県生まれ。国民学校4年生の時に葛根廟事件に遭遇。

会社員を経て平成14年父の後を継いで興安街命日会の代表。

『葛根廟事件の証言 草原の惨劇・平和への祈り』564頁の冊子編集。事件のことを書いた『流れ星のかなた』私製本 上下巻がある。